

小学校高学年

- 1 主題名 生きる幸せ 指導内容 高3-(2)
- 2 資料名 「祖母のなみだ」(自作資料)
- 3 指導について

本資料は実話を基に再構成したものである。主人公は、大好きだった祖母の死に直面し、祖母との思い出やその生き方を振り返る。その中で、生きることの尊さに気付いていく姿が描かれている。子どもたちは、祖母の死と対比させて生前の祖母の思いや願い、生き方を考えていくことで、生命に限りがあることや生命のかけがえのなさについて考えることができるであろう。

特に、生前の祖母の「死」への恐怖や生きたいという心からの願いに気付いたときの「わたし」の心情を深く考えさせるようにし、ねらいに迫ることができるようにしたい。

4 ねらい

生前の祖母の「死」への恐怖や生きたいという心からの願いに気付いたときの「わたし」の心情を考えることを通して、生命のかけがえのなさに気づき、自他の生命を大切にしていこうとする態度を育てる。

5 展開

	学習活動	主な発問と予想される児童の意識	指導上の留意点	備考
導 入	1 「死」についての身近な経験を話し合う。	○ 身近なところで人や生き物の「死」に接した経験はありますか。	・いくつかの例を基に、感想などを話し合わせ、本時の学習への動機付けとする。	
展 開	2 資料「祖母のなみだ」を読んで話し合う。	○ 祖母が亡くなったとき、祖母との思い出を振り返りながら、「わたし」はどんなことを考えていたでしょう。 ・死んでしまったなんて信じられない。 ・あんなに元気だったおばあちゃんなのに。 ・おばあちゃん、これまで本当にありがとう。 ○ 病室で父にしがみついた祖母の姿を見たとき、「わたし」はどんなことを思ったでしょう。 ・おばあちゃんは、不安で不安でたまらなかったんだ。 ・病気なんかには負けないで、また元気になってね。 ・おばあちゃんのために、わたしも何かをしたい。 ◎ 泣いて父にしがみついたときの祖母の涙を思い出しながら、「わたし」はどんなことを考え	・「わたし」が直面している一つ一つの状況を丁寧におさえ、白い布を顔にかけられ二度と目を開くことのない祖母を見て、祖母との思い出が次々とあふれてくる「わたし」の悲しみや寂しさに共感できるようにする。  ・祖母の行動や様子に着目して、祖母の「死」への恐怖や生きたいという心からの願いに気付かせるとともに、そんな祖母の姿を初めて見て驚いた「わたし」の心情に思いを巡らせられるようにする。  ・発言が出にくい場合には、「おばあちゃん……。」に続く言葉を考えさせ、「わたし」の心情	ワークシート

	<p>たのでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• おばあちゃん、もっともっと生きたかったらうね。</li> <li>• 今度はわたしがおばあちゃんを支えたかったのに……。おばあちゃん、ごめんね。</li> <li>• おばあちゃん、今まで元気でいてくれてありがとう。わたしも元気ががんばるね</li> </ul> <p>3 自分たちの経験を出し合い、考える。</p>	<p>たのでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• おばあちゃん、もっともっと生きたかったらうね。</li> <li>• 今度はわたしがおばあちゃんを支えたかったのに……。おばあちゃん、ごめんね。</li> <li>• おばあちゃん、今まで元気でいてくれてありがとう。わたしも元気ががんばるね</li> </ul> <p>○ 「生命を大切に生きていきたい」と思ったことはありますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 交通事故にあった人のお見舞いに行き、その話を聞いたとき。</li> <li>• ニュースなどで、戦争や災害で多くの人々が亡くなったことを聞いたとき。</li> </ul>	<p>に迫りやすくする。 また、ワークシートに書かせたり、グループで話し合わせたりすることを通して、考えを広げ深められるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 自分たちの生活経験を振り返って話し合うことで、身近にいる多くの人たちの生命や自分自身の生命を大切にしていこうとする気持ちにつなげたい。</li> </ul>	
終末	<p>4 「心のノート」の64、65頁を見て考える。</p>	<p>○ 「心のノート」64、65頁を見ましょう。思ったことや感じたことがあれば書きましょう。</p>	<p>• 「心のノート」を見て、本時の学習で考えたり感じたりしたことを書き込ませる。</p>	「心のノート」



「心のノート」高学年用64、65頁

## 6 小学校第5学年での実践から

本資料は、祖母の臨終というインパクトのある場面が始まるため、子どもたちは自然に資料の話の中に引き込まれていった。祖母とその家族という身近な存在が題材であったことも、子どもたちが主人公に自分を重ねながらその心情を考えていく上でとても有効であった。主発問では、それぞれが真剣に祖母の願いや「わたし」の思いを考え、ワークシートに書き込んでいた。

【泣いて父にしがみついたときの祖母の涙を思い出しながら、「わたし」はどんなことを考えたのでしょうか。】

- おばあちゃん、今までわたしのめんどうをいっぱいみてくれてありがとう。おばあちゃん、あのとき父に死にたくないよと言いたかったのかな。
- おばあちゃんはもう覚悟できていたの。笑って励ましてくれてたおばあちゃんが好きだったよ。ありがとう。
- あのとき、おばあちゃんはもう自分がそう長く生きられないと思っていたかもしれないな。死ぬのが怖くて父にしがみついたのかな。
- おばあちゃんともっといっぱい話したかったし、おばあちゃんが死ぬんだったらもっと手伝いや看病してあげたかった。
- おばあちゃん、お父さんに泣いてしがみついたのはもう自分が死ぬと考えていたからなのかな。もう少し生きていたかったのかな。私は、おばあちゃんにもう少し生きていてほしかったよ。おばあちゃん、天国でわたしを見守っていてね。
- おばあちゃんはいつも元気で、くよくよしていたら励ましてくれるやさしく強いおばあちゃんだった。しかし、泣いて父にしがみついたおばあちゃんを見て、いつもは元気で強いおばあちゃんにも弱いところがあったんだなと初めて思った。おばあちゃんにもつらいことがあったんだな。

祖母が病気や死への不安を抱えながら生きてきたことや「生きたい」という強い思いや願いをもっていたことに子どもたちが気づき、生命が亡くなることの悲しさ、生命の有限性やかけがえのなさを感じることが分かる。

展開後段では、最近あった台風や地震などの自然災害のことが話題となった。自然災害の恐ろしさとともに、その中で人々が力を合わせ励まし合って生き抜いた姿や、土砂に埋もれていた子どもの生命や倒壊した家屋の下敷きになった人を助けようと懸命になっていた人々の姿について話合いが進み、生命の大切さについて思いを新たにできたようである。

また、終末に「心のノート」を開く機会をもった。自分の生い立ちを振り返るページや生命を大切に生きていくことへのメッセージを読むことで、「自分が生かしていくいのち」という「生き方」に目を向けて生命の尊さを感じることができ、道徳的価値を更に広げ深めることにつながった。

## 7 生命尊重にかかわるその他の資料

- |            |                             |
|------------|-----------------------------|
| 「あの子があぶない」 | 文部省 道徳教育推進指導資料（指導の手引き）3     |
| 「祖母のつえ」    | 文部省 道徳教育推進指導資料（指導の手引き）3     |
| 「たんぼぼのうた」  | 奈良県教育委員会 小・中学校道徳教育用郷土資料     |
| 「命のバトン」    | 奈良県教育委員会 小学校道徳番組「ひとみかがやくとき」 |
| 「精いっぱい生きる」 | 奈良県道徳実践活動学習教材「ひびき合う心」高学年編   |

## 祖母のなみだ

「間に合わないかな……。」

車を運転している父がつぶやきました。母も兄も、何も言わないでじっと前を見つめています。わたしは心の中で、（おばあちゃん、がんばって）と言いながら手を合わせていました。今日は奈良のおばあちゃんの家がとても遠く感じられました。

やっと祖母の家に着きましたが、祖母の顔にはもう、白い布がかけられていました。

「おばあちゃん、やっぱりだめやった。あまり苦しまずに息を引きとったよ… …。」

と、おばがなみだをこらえながら言いました。

母といっしょに祖母の手をにぎると、まだ温かくてねむっているようでした。でも、もう祖母はにぎり返してはくれません。なみだがあふれてきました。じっと祖母の顔を見てみると、祖母との思い出が次から次へと頭にうかんできました。

わたしがまだ低学年のころ、祖母は奈良から電車でよくわたしの家に来てくれました。わたしは「カギっ子」だったので、祖母が来てくれたときは、学校から帰ると家にふとんがほしてあってすぐに分かりました。

「さっちゃん、おかえり。」

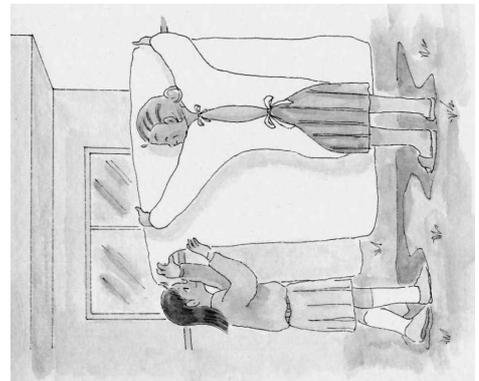
という声を聞くと、（おばあちゃん、また来てくれたんや）ととてもうれしかったことを覚えています。

わたしの家に来ると、祖母はふとんをほしたり、庭の草を引いたり、いそがしい母に代わっていろいろなことをしてくれました。祖母の魚のにつけはおいしくて、わたしの好物でした。いっしょに洗<sup>せん</sup>たく物をたたんだり、おやつを食べたりしながらよく話もしてくれました。子どもころに木登りをして遊んだことやけんかをしたことは、祖母のお決まりの話でした。そしてわたしにも、

「さっちゃん、いざとなったら、相手が男の子でも足のここ、べんけいの泣きどころというこころを思いっ切りけとばしたり。べんけいでも泣くというくらい痛<sup>いた</sup>いから、『あいたたっ。』って言うてる間に走ってにげるんや。」

と言って豪快<sup>ごうがい</sup>に笑いました。

（あんなに元気なおばあちゃんだったのに……。）



そんな気丈な祖母の弱さを初めて見たのが、今回の入院のときでした。  
亡くなる一か月ほど前、祖母は家でたおれ、救急車で病院に運ばれました。  
わたしたちが病室にかけつくと、祖母は点滴をしてベッドの上にていていました。  
「おばあちゃん、みんな来たよ。」

と言って、父がのぞきこんだときです。祖母は泣きながら父の名前を呼び、ベッドに横たわったまま両手で父にしがみついたのです。わたしは、びっくりしてしまいました。

父はやさしく祖母をだきしめて、背中をさすりながら、  
「どうしたんや……。だいじょうぶ、だいじょうぶやで……。」

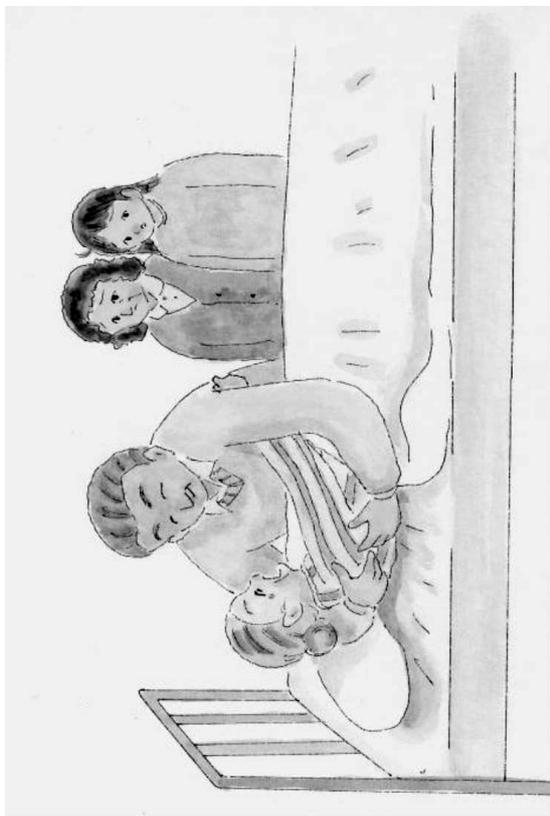
と言いました。祖母はまるでお父さんにあまえる子どものようでした。そんな祖母の姿を見たのは初めてでした。

その日からみんなで交代で祖母を看病しました。わたしも母といっしょにつきそいました。祖母はほとんど何も食べられなくなっていましたが、わたしがアイスクリームを口に入れてあげると、いつものようにおいしそうな顔をしました。そして、

「ああ、おいしい。生きていてよかった。幸せ。さっちゃん、おばあちゃんなあ、十年前に病気になったとき、『どうかあと十年だけ命をさずけてください。』ってお願いしたんよ。さっちゃんたちもまだ小さかったしな。あれから十年も生かしてもらった……。」

と言って、わたしの手をぎゅっくにぎりました。

私はなみだがこぼれそうになりましたが、ぐっつとがまんしてその手を強くにぎり返しました。わたしが祖母と話をしたのは、それが最後でした。



結局、祖母は、元気に家へ帰ることはできませんでした。

まだほんのりと温かい祖母の手をにぎりながら、わたしは、泣きながら父にしがみついたときの祖母のなみだを思い出していました。

「おばあちゃん……。」